# ネパールの風

’９８ネパール日記

ヤラ・ピーク登頂記　その・７

後藤　隆徳

第８日目　４月３０日（晴）　ティキャプサ・カルカ８：００～ヤラ・カルカ（Ｂ・
朝－２度・霜　Ｃ）１０：００～裏山に高度順化～Ｂ・Ｃ１１：３０

## いよいよ待望のベース・キャンプに入る

今日も静かな朝が明けた。入山以来ずっと好天気が続く。ぼちぼちモンスーン（日本の梅雨みたいなもの）の影響も出てくる頃だが、今のところ兆候は無い。天候が安定すれば気温の低くなる秋（ポスト・モンスーン）より、温かくなるこの時期の春（プレ・モンスーン）の方が登り易いかもしれない。

天気が良い分冷え込み霜も降りた。山かげということもあり、洗顔をして加藤がタオルを干したらバリバリに凍ってしまった。

今日の行程もゆったり、のんびりしたものだ。標高４４００ｍのここから、標高４７５０ｍのベース・キャンプまで登るだけである。日本なら１時間程度のところだが、倍位時間を掛ける。

道は相変わらずランタン・コーラ右岸をだらだらと遡る。右手正面にこの辺りでは大きいＧａｎｃｈｅｎｐｏ（ガンチェンポ・６３８７ｍ）が美しいヒマラヤ襞（ひだ）を光らせる。このヒマラヤ襞は日本では厳冬期鹿島槍に小規模のものが見られるが、低温で強烈な風が吹くヒマラヤならのものである。

途中大きな岩があり小休止。シコタが盛んにサーダーにボゥダリングをけしかける。私もやりたかったが、足でもグレって登頂がパーになると怖いので笑って見ていた。シコタは帰りにもう一度勝負すると言っていた。

あまり馴染みがないアンセッテイというシェルパと話した。英語が結構出来るので聞いてみたら、各国の大きな遠征にしばしば参加してるとのこと。今泉が右手のＮａｙａ・Ｋａｎｇａ（ナヤカンガ・５８６２ｍ）を何の意味か尋ねると、「神の山」と答えた。私がすかさず「私の名もゴット（ゴトー）」だと言い、お互いに顔を見合せ笑った。

更に登り続けＴｓｅｒｇｏ・Ｒｉ（ツェルゴ・リ＝標高不明５０００ｍ前後）の山裾を

(上) ティキャプサ・カルカ
バックはランタン
リルン
(中) ガンチェンボ
(6387m)
(下) 正面中央が
ヤウ・ピーク

グーツと回り込みランタン氷河の下部に達すると谷のどんずまりに今回我々が登る、初めて見る「Ｙａｌａ・Ｐｅａｋ（ヤラピーク・５５２０ｍ」が青空にポッカリと浮かんでいた。日本を出発して８日目にしてようやく目標の山に会えた訳である。

ただ、ヤラ・ピークは回りのガンチェンボやポンゲンドプクなどのヒマラヤ襞を持つ峻峰ではなかった。下から見る限りでは平凡でちょつと丘より大きい感じの山だった。その事は私も出発前から良く分かっていたので特に落胆することはなかった。むしろ、「ここまで来させてもらったことへの感謝」、「仲間とヒマラヤに登れる喜び」、「５５２０ｍの山に登れる楽しさ」を感じていた。

谷には雪が多かった。日本の５月のアルプスのような感じで雪が腐り、所々ズボズボと潜る。今泉とＰｏｎｇｇｅｎ・Ｄｏｐｋｕ（ポンゲンドプク・５９３０ｍ）をバックに写真を撮り合った。

標高４７５０ｍのベース・キャンプに到着した。ヤラ氷河の末端の高台で展望は申し分なく気持ちの良い所だった。夏にはやはり牛の放牧が行われるため、石造りの放牧小屋（カルカ）が２～３棟あった。テント場はその小屋周辺にあるのだが、ここも本来のテント場でなく臨時のものだった。テン場は雪解けで田んぼのようにグジャグジヤしていた。そこは昨年放牧された牛の糞が大量に混ざっていた。そこに平気でテントを張る。テント場としては最悪だった。

テントに入るとその「牛糞汁」がシートから滲みるような滲みないような、何とも気持ちが悪い。それに牛の糞独特の「匂い」が堪らない。ちなみに靴に付いたこの「匂い」は日本に帰ってもしばらく消えなかった。個人なら絶対こんな所には張らないが仕方ない。せめてと思い回りには排水溝をしっかりと作った。

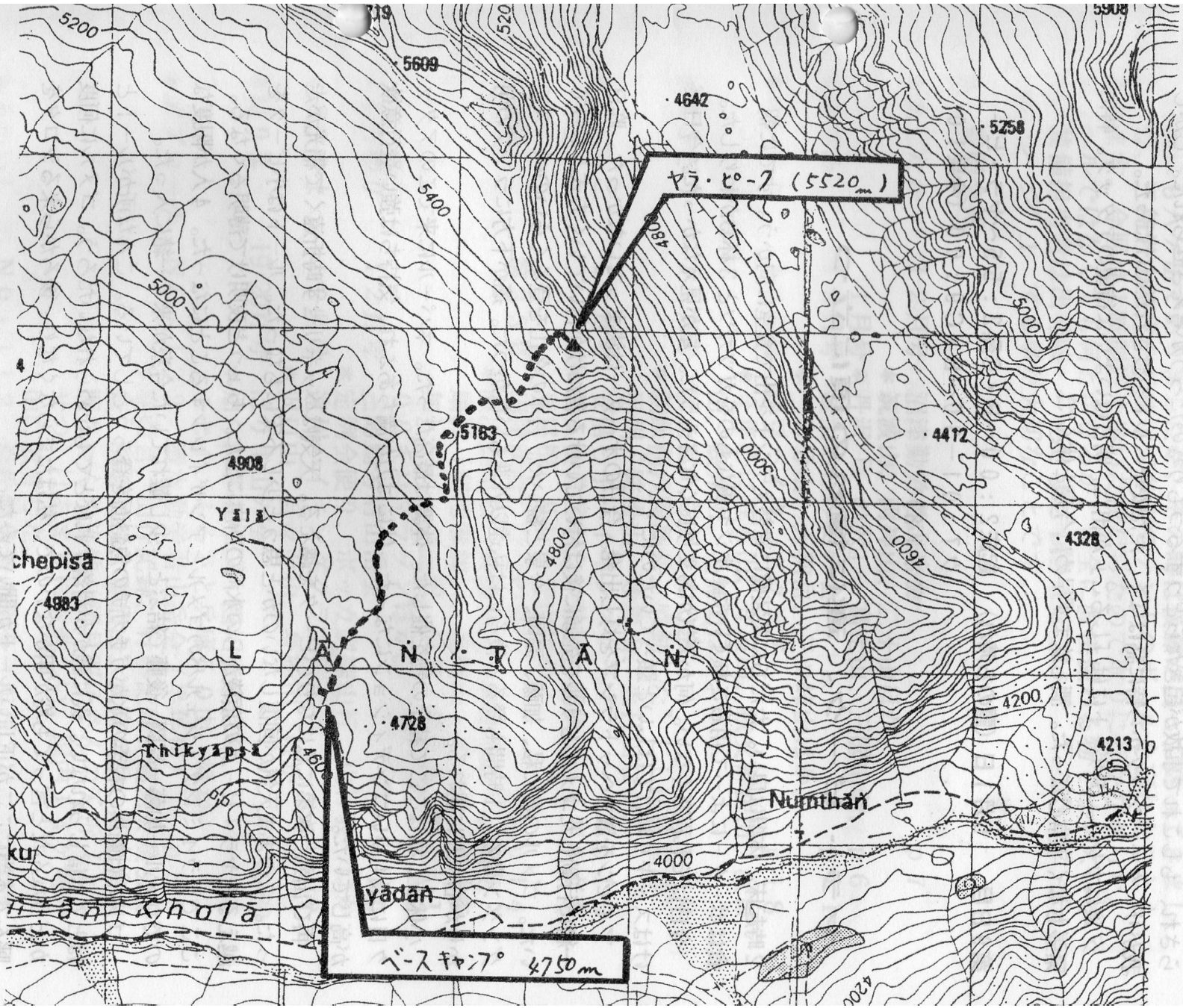
■

その後は自由行動だつたので、３人で明日のアタック時トップを務めるシェルパのゴメル（３８）とリル（３５）を伴い、裏山に高度順化に向った。下の方は雪が腐り膝までズボズボ埋まり苦労する。それでも稜線に出ると雪はしっかりしていた。ポンゲンドプク、ガンチェンボ、ランタン・リルン、キムシュンの巨峰群が青空に大きく光る。

ふと、目を凝らすとＡ隊が明日アタックするヤラ・ピーク下部のルートを全員で登っていた。Ａ隊は何事にもまとまっていた。かたやＢ隊は自由行動。この違いは担当するリーダーの考え方ひとつだった。

帰幕後もＡ隊はゴトウマリ・リーダー（後藤真理＝彼女はこの後６月～８月、同人シルバータートル隊でカラコルムのガッシャーブルムⅡ峰・８０３５ｍに遠征したが、登頂はならなかった）を中心に明日のアタック時の「タイトロープ・ビレイ」（パーティーの間でロープを２～３ｍ、時には１～２ｍにし、ロープを張ったままの状態にして四六時中ビレイを続け登行する技術）の説明、方法、訓練を全員で時間を掛け取り組んでいた。

素人の参加者が多い中だからこそ、それは当たり前の事だろう。そのような方法の知識


ヤラ・ピーク (5520m)
ベースキャンプ 4750m
5200
5609
4642
5258
5400
5000
5183
4908
Yala
chepisa
4983
L A N G T A N
4728
Thilkyapsa
4800
4600
4412
4328
4200
4213
Numthan
4000
yadan
Shola

があるとないとでは、とっさの場合意外と違いが出るものだ。実際、翌日危険な氷壁を登らされ、もしこれで事故が起きたらどうするつもりなのだろうか考えさせられた。しかし我がリーダー、シコタから特に話はなく、ただ安全ベルトを渡されただけだった。

夕食はカレー。デザートには「しるこ」が出た。明日はいよいよ待望のアタック。特に緊張もなく平常心だった。酒も飲まず早めに今泉と休んだ。

**第9日目　5月1日（雪のち晴れ）　起床2：00～B・C発2：55～ヤラ・ピーク7：01－30～B・C9：00（今泉10：18）**

## ヤラ・ピーク、遂に憧れの頂に立つ

2時起床。体調は良い。ただちに冬装備に着替えテントを出で食堂に向かう。すでに朝食はポーターによって用意されていた。オジヤ風なものをガツガツと3杯おかわりした。

今日はそれ程寒くない。何か天気があまり良くなさそうだ。星が見えなかった。今日だけはスッキリ晴れてほしいと願っていたのに・・・。

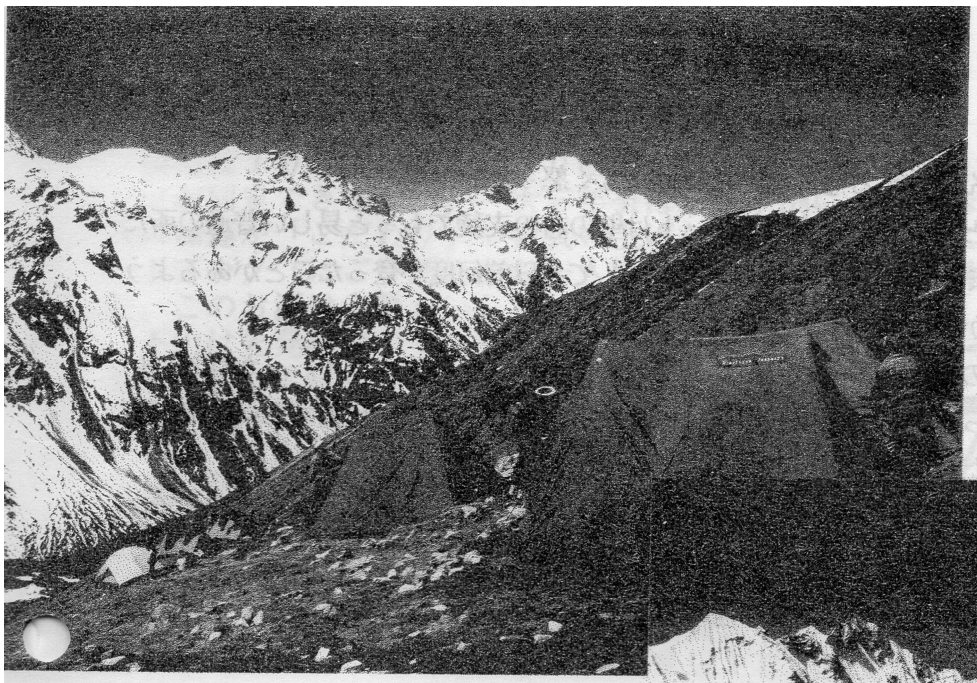
アイゼンを履きヘッドランプを灯し出発。今日のオーダーは決まっていなかった。昨日一緒に行動したゴメルとリルを先頭に後は付いていける者だけが付いていく方式となっていた。ゴメルの後に私、加藤、高岡、今泉と続いた。日本の冬山を登るくらいのペースでグングン登る。1時間も登ると後ろには私達以外誰もいなかつた。遙か下方にランプの明かりが右に左に揺れる。

小休止。私はここで特上の物を催した。体調は最高だった。ネパールに来てこのアタック日に最も良いコンディションになった。体には力が満ちあふれ、気持ちは強い登行意欲が高じていた。

再び出発。次第に急になり小ピークを越える。天気はハッキリせず時折遠くで稲光が走った。このまま天気が回復しないのかと思うと少し不安にもなった。ルートは小ピークを越えるとヤラ・ピークの頂稜からの氷河の断崖に出た。ちょうど夜明けで薄明るくなる。ここでクライミング・シェルパのゴメルとアンザイレンすることになった。4人が限度なのでゴメル－加藤－高岡－後藤で結ぶと、少し離れていた今泉が来て一緒に入った。

ゴメルは断崖の右手の氷がガチガチの急斜面を登ろうとしている。こんな所がルートとはとても信じられない。仮に誰かが滑落すればとても止められないだろう。ゴメルに何度かどうなんだと言っても埒が明かないので、私はたまらなくなり、後ろから来るシコタを呼んで本当にここが正しいルートか聞いてみた。

シコタは確か何回かヤラ・ピークを登っていると言っていた。しかし、何故か明解な返答はなかった。こんな所を素人然とした連中に登らせるなど、全く気違い沙汰である。よ



(上) B.Cのヤラ・カルカ
(中) B.C下の雪渓
バックはホンゲンドフク
(下) シェルパのリル(左・35)
とゴメル(38)

くこれで「プロ」なんて言えるものだ。私は遠慮なく怒った。

下山時分かったことであるが、実際のルートは壁の右の支稜でもっと易しい普通の所だった。また、クライミング・シェルパのゴメルにしても以前何度か登ったことがあるようなことは言っていたがどうもハッキリしなかった。

結局、ツアー会社の安全への配慮とはこんなものだろう。結果オーライ。「かなりいい加減」という印象だった。私がかつて尊敬し好きだった芳野満彦氏が経営する会社で信頼していただけに残念だった。

壁の上は雪稜が続いていた。いつしか本格的な雪が降ってきた。ある意味でヒマラヤで雪に降られるなんて「感激だ」なんてノンキなことを考えていた。

（次号につづく。ナマステ・ナマステ）